

鎌倉時代語研究 第三輯 目次

石清水文書田中宗清願文案に現れた藤原定家の用字用語について  
尾張國解文の研究

——古文書における表現方法の基本的原則を求めて(一)——

鎌倉時代の片仮名交り注釈書

観智院本類聚名義抄和音分韻表

古本説話集のかむづかい

漢語動詞と和語動詞との、語義上の対応・相關関係続考

——三、四の語群について——

教行信証における「ヒト」と「モノ」

——「者」の訓をとおして——

前田家本色葉字類抄掲出漢字に並記された別訓の機能

書陵部蔵医心方・成養堂文庫蔵医心方における付訓の基盤

——和名類聚抄・本草和名との比較を通して——

日本靈異記古写本の比較に基づく文末の助字「也」「矣」字の用法

小林 芳規

小林 芳規 一頁

三保 忠夫 一九頁

柳田 征司 五一頁

沼本 克明 六一頁

山内洋一郎 七九頁

佐々木 峻 九一頁

東辻 保和 一〇五頁

村田 正英 一一七頁

松本 光隆 一三三頁

鈴木 惠 一五五頁



二 八行転呼音の表記

語中語尾のハヒフヘホ全てに転呼音現象と認められる表記がある。八行仮名で記された正用は多種多量なので、その全例を報告することができない。誤用例は全てとり上げ、四筆(A<sup>1</sup> B<sup>14</sup> C<sup>13</sup> D<sup>10</sup>)に分ける。各筆に共通する事例は別に記述することが多い。括弧内に所在ページ・行の他に、四筆全体に見える正用数を分母に誤用仮名表記を分子にした数値を添えて、参考とする。

1 は——わ(1)

- A さい(1) (幸 317%)
  - C ず(1) (菟 4612%) けい(1) (埃 4810%)
  - く(1) (小 1529%) ち(1) (母 123%)
  - く(1) (黒子 125%)
  - D う(1) (傍 233%) じ(1) (俄 238%)
  - わ(1) (重 269%) ち(1) (繩 284%)
  - く(1) (加 248%)
- 右の語の中で「仮名文字遣」(『國語学大系』による)にさいむい 辛 福 にむかなり 辛介 頰 俄 む、 母 嬢 たはら 俵 わらし 童 なむ 繩 糸

右の語の中で「仮名文字遣」に出るものがある。

- く(1) 物 食 けい 灰
- う(1) ひて 失 喪 にひて 荷 擔
- を(1) ひ 蓋

右の他に「ひ」表記のない語がある。

- 「つひに」 内 井 (D 244 2076%)
- 「そこひ」 そ 井 (D 224 2517 263%)
- 「ちひさし」 ち 井 (A 267) ち 井 (D 229)
- 「ちひさやか」 ち 井 (さや) (C 131) ち 井 (D 229)
- 「仮名文字遣」に次のようになり、
- そこめ 底 井 神 少 つねに 遂 終 竟 とい
- ちひさし 小 少 (下官集つねに)

前二者は、今日から見て誤っている表記により「仮名文字遣」に一致し、後者はそれと抵触する表記を梅沢本四筆が用いている。八行勅訓連用形の「ひ」に「あひひ」「あひはひ」等を加えて、60余例が「ひ」で記されている中の極少数の遠例である。「つひに」「そこひ」「ちひさし」「ちひさやか」は定家仮名遣と必ずしも直接には結びつかない慣用で、他はやはり表記のゆるみと見てよいであろう。

3 ふ——う

- B ゃ(ろう) (701%) け(う) (宣 713%)

とある。梅沢本で「ハ、ム、シ」17例に対し「むわ」が一例のみあるのは、例外と見て、表記意識の緩みと解してよいと思われる。「わらし」も同様である。では、梅沢本中の唯一例が「わ」となっている「けいしく」「むくろ」「むわら」「むわ」「くわう」はどうか。語中、語尾の「は(む)」表記例は「あ(む)」「あ(む)」「あ(む)」「あ(む)」「あ(む)」(36%)を始め、助詞を除いても約46%も存し、「わ」は右の僅か10例なのである。特に「わ」表記を採、たものとは思われない。

2 ひ——い・ぬ

- A おい(1) (生 155%) じい(1) (曾孫 465%)
- B あ(1) (思 551%)
- C せ(1) (慶 77%) わ(1) (麻柱 4%)
- す(1) (交 498%) ぐ(1) (食 131%)
- ゆ(1) (結 461%) せ(1) (追 473%)
- じ(1) (坦 1702%) ゆ(1) (結 139%)
- い(1) (浄 1327%)
- D め(1) (縫 271%) め(1) (縫 2710%)
- し(1) (灰 218%) ぬ(1) (福前 2513%)

を引れく(例 89%) ぬ(1) (震 1058%)  
 を引れて(例 155%) ぐ(1) (食 131%)  
 を引れ(1) (例 132%) お(1) (坂 18410%)  
 D を引(1) (横鼻 216%) す(1) (吸 236%)  
 加(1) (河内 252 2710%)  
 川(1) (集 204%) く(1) (加 248%)  
 この中で「仮名文字遣」に「ふ」形で出るものにかけるふ 精 疑 虹 蛭 胡 蟹 派 氏 物 持 在 え たふる 倒 疊 卧 たふる 驚 牛 馬 の 及 があり、「う」形に次例がある。

たうさき 精 鼻 輝 龍 の かうち 龍 河 内 在 野  
 「河内」は「内」に引かれた画が強いのであろう。  
 「倒る」はまた八行転呼に添ってタウルとなり、次に「驚」などの長音化の方向を殊らす、音節保存の力へと逆行してゆく。「た」をれるもの「驚」(仮名文字遣)はあるが、梅沢本には「を」表記がない。「願ぐ」「茶」などの変遷と併行するであろうが、梅沢本ではこれらの語に「う」を「表記がない」。「華」の語群は「う」が「さ」「し」「ぶ」などが梅沢本にあり、A 2・B 2・C 6・D 13、計 23 例が全て「う」である。

たぬとし 青 華 (仮名文字遣)